

## シモン・ヴーエ作《キリストの神殿奉獻》に描かれた黒山羊のモチーフ

伊藤 里華（東京藝術大学）

シモン・ヴーエ（1590-1649）は、国王付首席画家としてルイ 13 世の治世下で活躍したフランス人画家である。1638 年のルイ 14 世の誕生を境にパリの建築物を急速に整備し始めた宮廷は、パリで最初のイエズス会聖堂であるサン・ルイ聖堂の建設を再開し、主祭壇の絵画をヴーエに依頼した。この祭壇画《キリストの神殿奉獻》（1640-41 年、ルーヴル美術館）には、いまだ意味の明らかでないモチーフが存在する。その一つは画面左下に描かれた、禿頭の老人の足元に横たわる黒山羊である。

19 世紀前半に批評を残したジョセフ・ラヴァレーはこの動物を「雄羊」、そして老人を「物乞い」と仮定し、この動物は本作品の注文主であるリシュリユー枢機卿を賛美する目的で描かれたという解釈を提示した。ラヴァレーの解釈は 1990 年にジャック・テュリエらによって開催されたヴーエの回顧展のカタログでも引用されている。2017 年には、ミレーヌ・サランによって本作品に描かれたいけにえが山羊であることが指摘されたが、その際にも黒山羊のもつ象徴性についての考察はおこなわれなかった。本発表の目的は《キリストの神殿奉獻》の中で黒山羊がもつ意味上の役割を明らかにすることである。そのために、同様に黒山羊が描かれた二点の比較作品を分析し、解決を試みる。

一作目は、フェラーラ派の画家ガローファロ（1481-1559）によって描かれた《旧約聖書と新約聖書の寓意》（1528-31 年、エルミタージュ美術館）である。画面右下には、黒山羊のいけにえを捧げる人々と祭司が描かれ、黒山羊の下にはヘブライ語で「罪」と記載されている。作品の上部にある銘文には「むなしい捧げ物を再び持ってくるな。香の煙はわたしの忌み嫌うもの。お前たちの手は血にまみれているから、お前たちの祈りは聞き入れない。」と記載されており『旧約聖書』「イザヤ書」1 章 11-15 節の要約となっている。この作例によって黒山羊はイザヤ書に記述される「むなしい捧げ物」であり、旧約聖書の寓意であることが明らかになる。

二作目は、フリードリヒ・スストリス（1540-1599）の原画素描に基づいてアントニオ・マリア・ヴィアーニ（1550/60-1629）によって制作された対をなす祭壇画《旧約聖書のいけにえと三位一体》と《聖母子と受難具を掲げる天使たち》（1588-89 年、ミュンヘン、ザンクト・ミハエル聖堂）である。《旧約聖書のいけにえと三位一体》では、旧約聖書のいけにえとして黒山羊が香炉の前に描かれている。スストリスの構図は、ガローファロの作例と同様、旧約の供犠とキリストの犠牲との対比的意味を表すのみならず、完成作がイエズス会聖堂に設置されたという点でもヴーエの作品と共通している。

本発表ではこれらの作例との比較により、《キリストの神殿奉獻》に描かれた黒山羊は、旧約聖書のイザヤ書に書かれた「むなしい捧げ物」と解釈することが可能であることを新たに指摘する。